会報
47号
はこだてふーう

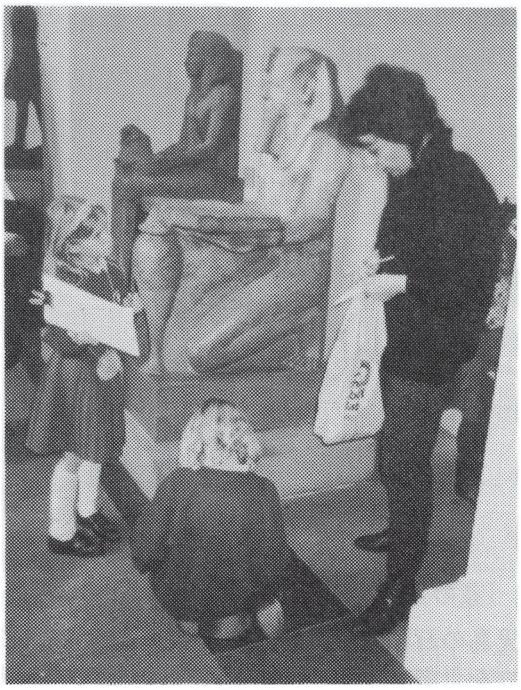
函館の歴史的風土を守る会会報
No.47　H 6. 6. 20
発行所　函館の歴史的風土を守る会
事務局　函館市五稜郭町４３－９
五稜郭タワー株式会社内
電話（0138）51－4785
印刷所　双葉印刷 電話 53－7730番

英国に学びたい

元町倶楽部 代表　村岡武司

英国は美しい。北海上空から見えてくるランドスケープは夢のように美しい。緯度は日本よりも高く、カムチャッカあたりに相当するのだが、温暖で、穏やかな大地である。３月でも緑の絨毯を敷きつめたように見える。芝、草地、森などの緑の中をゆるやかにカーブして走る道路に沿って集落が形成されている。建物の素材はほとんどが煉瓦、石で、その色と質感は、白川郷の萱葺きとおなじくらい大地にとけこんで見える。建物の高さはほとんどが２階建て、大都市の繁華街でも５階建てくらいだがその歴史的規模に圧倒される。百年、二百年は普通で、４世紀、５世紀という猛者もさりげなく混在している。

明治の留学生たちもこの風景に感嘆の声をあげたに相違なく、故国日本にそのかたちの美しさを持ち込もうとしたのが容易に想像できる。その見事な風景を、現在まで維持させることに多大な貢献をしたのが、一つはTown and Coutry Plannig Actという法であり、もう一つが市民によるトラスト活動であろう。日本の都市計画法が、ひたすら都市化を追求してきたのに対し、都市の魅力と田園の魅力を別なものととらえ、そのどちらも大切なのだという視点が根底にある。昨年６月に訪ねた、ファバシャムソサエテイのパーシバル教授。セントヘレンズ グランドワークトラストのジョン ハンドレイ所長。そして ダーウエン シヴィックトラストのフィッシャー代表など、トラスト活動のリーダーたちが口をそろえて取り上げたのが産業の発展による都市と郊外の汚染と破壊。その産業の衰退による都市と郊外の荒廃だ。英国にはさまざまなトラスト活動があり、国家も企業も市民も多かれ少なかれこれに携わっているが、産業革命という人類史上もっともドラマチックな出来事をみずから招き、その恩恵と罰をうけた者たちが、生み出してしまった問題を理性的かつ自主的に解決しようとする営みがその根底にあるということなのであろう。



エジプト文明を学ぶ英国の子供
（大英博物館 入場無料）

緑の絨毯の上で優雅に草をはむ英国の羊たちはけっして集団にならない。丁度テリトリーを分け合っているように分散している。日本の羊たちか狭い牧場で群れになり左右に行き交う姿を見慣れていると、英国の羊に哲学的なインスピレーションを受けたような気がしてくる。たとえばロンドンのナチュラル ヒストリーミュヂァムを覗いてみると、賢くなろうとしているのは羊たちばかりではない事がよく理解できる。

アルフレッド ウォーターフォードの代表作であるその建造物はみごとなもので、バッキンガムと見まごうばかり。デイノザウルス展という恐竜を目玉にした企画展が開かれていたが、その広大な展示は知らず知らずのうちに地球という環境と人間とのかかわりあいや、その結果どのようになったのか、あるいはなろうとしているのか、が理解できるようになっている。最後のブースは地球環境の危機について説かれ、しめくくりは……悲しむべきことにこれが実態である。その責任はどこの誰ということは出来ない。だが事実は事実で人類はまさにそこに直面しているのであり、対処を迫られているのもあなた達そのものである…というような言葉で了っている。親や先生に連れられた大勢の子供たちの姿が印象的だったが、成熟した大人、良識と勇気をもった市民が育つ土壌があるのである。

ロンドンのバービカンセンターやドックランズ、リバプールのアルバートドックなど大規模な再開発地区を眺めていても感じたことなのだが、産業の衰退などでスラム化した場をいかに快適な空間に仕立てなおすかに努めているのは日本やアメリカと同じなのだが、居住する、労働する、教育する場であるという基本視点がたしかなのだ。アミューズメント一辺倒、営業テナントおよびそれを消費する客が来なければ、いかに大量の資金や努力を注ぎ込んでも失敗に終わり、ふたたびスラム化してしまうしかないリスキーな再開発とは手法と理念が大きく異なるのである。

この三年の間に三度英国を尋ねた。特に去年は様々なトラスト活動の実際を現地にみて指導者のかたがたのレクチュアーをうけることもできた。その熱意やアイデア、あるいは組織管理や手法などとても参考になった。明治以来実にさまざまな人や組織が模倣を求めて彼の邦に渡った。しかし学ぶべきはかたちやシステムではなく、精神と英知であると知らされた。それはその国の美しい風景や豊かな過去の中にしか見いだせないものであり、言葉で説明できるものではない。

英国の美しい都市と都市を結んで、これまた美しい田園地帯の風景のなかを、ペンタグラム社デザインの美しい列車、インターシティー号が走っている。その車両の座席は、進行方向が背中になるようにデザインされているのである。そのほうが疲れない、というのが主たる理由のようだが、過去を見つめながら未来に向かう精神の顕れ、と考えるとこの国をよく理解することができる。

（当会運営委員）

第17回 全国町並みゼミ須坂大会（報告）

当会運営委員　石井　満

全国町並み保存連盟創立20周年記念、第17回全国町並みゼミが信州須坂市で５月21日㈯～３日間の日程で行われた。

函館からは、歴風会の田尻聡子さん、石井満、市から花岡さえ子さんの３名が参加した。

田尻さんは、保存連盟の役員で、何度も大会へ出席しておられるが、石井と花岡さんは初参加で、全国の町並み保存の熱意と運動の広がりを実感させてもらった。

この大会には、北海道から沖縄まで各地で町並み保存運動に携わる住民、研究者、行政関係者等、60余団体、約600人が参加した。

さらに、台湾から20人の方達が来日し、討議に加わった。

この大会で際だったことは地元須坂を中心に長野県の各地から多数の住民が参加し、歴史的環境の保存・再生に活発に意見を述べたことではなかったかと思う。

各地からの報告の中で、協同組合を結成し法人権を得て第２段階の活動に入った福島県の会津復古会、住民運動の世代交替に取り組む長野県の妻籠を愛する会、歴史的景観を無視し、災害復旧の名の下に強行されようとしている石橋撤去問題に取り組む鹿児島の石橋保存運動、運河の再生を通じて文化観光の確立を目指す小樽再生フォーラムなど、全国各地で新たな盛り上がりを見せていた。



「蔵のある落ち着いたたたずまい」

２日目の22日午後からは、４つの分科会に分かれた。

第１分科会……「伝建と町並みのこれから」
第２分科会……「観光と文化と町並み」
第３分科会……「環境と町づくり」
第４分科会……「町並みとこどもたち」

第２分科会には花岡さん、第３分科会には田尻さんと石井が出席した。第２分科会は花岡さんの報告をお読みいただきたい。

第３分科会では、石井満が「函館の歴史的環境とまちづくり」の演題で事例発表を行った。

他に「外はみんなのもの、内は自分たちのもの」を合い言葉に歴史的町並みを創造した長野県小布施町の町づくりの報告をはじめ、各地で展開されている住民・建築家・行政の協力関係のあり方について論議された。

また、町並みに加えて、橋や水路などの土木遺産を新しい文化財として評価する事の重要性が指摘された。

バブル経済と地価高騰に直面している台湾の参加者からは、特に函館市などでの歴史的環境保護・再生の経験等について質問があり、石井より、西部地区の高層マンション建設の折、住民の素早い立ち上がりで行政が、①建築指導要綱の制定、②景観条例の改正による保護地区の拡大、③地価監視区域制の導入、④高度地区指定など次々と対応して、環境・景観破壊マンション建設を断念させたなど、これらは町並み保存の地道な運動を続けてきた函館の歴史的風土を守る会を中心とする人的連帯の環が出来ていたからではないかと説明し、両国の環境保護運動の経験交流がなされた。

３日目は、「暮らしの心・再発見」と題して、伝統芸能の掘り起こしに取り組んでいる熊本県立劇場館長鈴木健二氏の感動的な記念講演を聞く。

今回のゼミで印象に残ったことは、ここ須坂の町並み運動において、住民の主体性が遺憾なく発揮されていたことである。

そこには、単なる対立関係も、又、一方的な行政主導とも異なる、住民と行政の成熟した関係を追求しているように思えた。

おそらく、このような関係の構築は、20歳をむかえた町並み運動の基本的なテーマとなるだろうと思う。

最後に、函館市では、西部地区の保全に目がうばわれている間に、市街地周辺の環境破壊が進み、目をおおうばかりであります。

この件に関し、一層の努力を払わねばならぬと、須坂ゼミ出席を機に改めて思った次第です。このことを申し添え、報告といたします。

（市議）

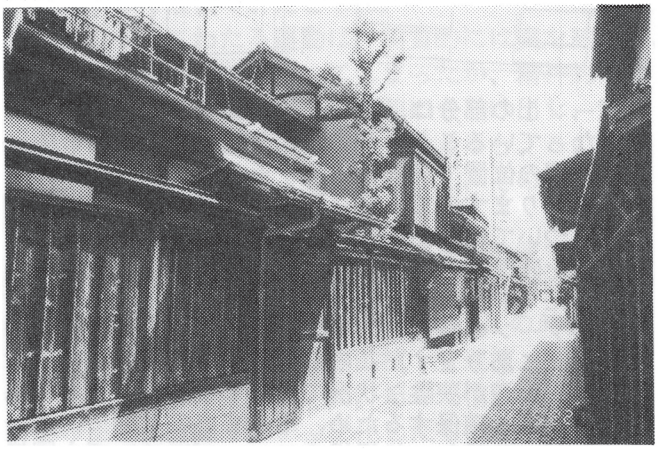
第17回全国町並みゼミ須坂大会に参加して

函館市都市景観課　花　岡　さえ子

五月晴れとなった５月21日(土)、長野県須坂市メセナホールに於いて午後１時の開会宣言とともに第17回全国町並みゼミ須坂大会が開催されました。

開会式に引き続いて「信州須坂の風土と町並み」と題して信州短期大学学長である理学博士市川健夫先生の基調講演が行われ、須坂の町並みの特徴や町並み成立の歴史的背景を聞くことができました。

須坂は江戸時代から製糸業が盛んな町であり生糸の保管蔵・みせ蔵としてたくさんの蔵が建てられました。また明治以降の町の急速な発展に反し都市開発の立ち遅れがみられ、これらのことが現在の小路・蔵の多い須坂の町並みを成立させる要因となったようです。



（花街：浮世小路）

その夜行われた歓迎レセプションでは、地元の主婦の人達によって“おやき”や“信州そば”をはじめたくさんの郷土料理がふるまわれるなど、とてもアットホームなもてなしをうけました。

１日目に引き続き好天気に恵まれた２日目は午後から予定されていた４つの分科会がそれぞれ行われました。消防署で行われた第２分科会は「観光と文化の町並み」というテーマで長崎総合科学大学教授の片寄俊秀氏を司会に参加者143名と一番多く、みなさんの関心の高さがうかがわれました。

はじめに、事例発表として「吹屋町並み保存会」の長尾有子氏の話があり、吹屋をどのように維持・発展させていくかが今後の課題であるということで話題提起がされました。

角館町長である高橋雄七氏からは角館は観光立町が目的ではなく、基本姿勢はあくまで文化財の保存に目的を置いているという話が聞かれました。

吹屋・角館の事例発表をかわきりに活発な議論が交わされ、討議は観光化と文化財保存という相反するものの対立をどのように克服するかということに進みました。

運河保存運動を始めてから10年を経た現在、年間500万人の観光客が訪れるようになった小樽市からは観光自体は悪いことではないが観光の目的が大切であり通過観光はあまり好ましくないのではないかという峰山富美氏の発言がありました。



「観光と文化の町並み」というテーマで始められた第２分科会は、観光と文化のバランスの難しさが浮き彫りとなり、最終的に安易な観光化を避け真剣に地域の文化を育み、いかにすれば外部から訪れる人々に感動を与えることができるかの追求が不可欠との認識に達しました。



（望桜・うだつのある老舗：山下薬局）

町並みウォッチングは２日目の午前中にフリースタイルでおこなわれ、須坂の町は地図を片手に歩き回るたくさんの人々の姿でにぎやかな日曜日となりました。

町のあちらこちらではボランティアの人達が懇切丁寧にゼミ参加者に道や建物の説明をしている姿を見ることができ、またこの町並みウォッチングのために日曜日にもかかわらずたくさんの人達がお庭やお座敷まで解放してくださいました。

町全体が１つとなって町並み形成に取り組んでいる姿勢が要所要所で感じられ、町並みゼミ初参加の私にとってすべて勉強になることばかりでした。

函館港西部ウォーターフロントと大町地区護岸整備について

函館市港湾部長　熊田義博

1. 基本的な考え方

函館山山麓に位置する西部地区は、函館港発祥の地であり、開港当時からの歴史的建造物が数多く集積しており、石畳の坂道と相まってエキゾチックな雰囲気を有し、優れた景観を形成しております。

この地区の歴史的な景観を、まもり、そだて、現在よりさらに優れた環境を創り出すために、昭和63年３月に「函館市西部地区歴史的景観条例」が制定されております。

景観条例の制定された昭和63年には、青函トンネル開通記念博覧会が開催されており、西部地区ウォーターフロント（末広地区）の赤レンガ倉庫群が再開発され、物販店・飲食店・ホール等に転用され、市民・観光客で賑わい、全国的に雑誌に紹介されるなど、注目されている地区であります。

このような、ウォーターフロントに対する市民の志向が高まるなか、昭和63年から平成元年の２か年をかけて、21世紀に向けた函館港の将来像を求め、「函館港再開発調査」（ポートルネッサンス21調査）が実施されました。

この中で、ウォーターフロント整備の考え方として、若松ふ頭から緑の島までを、一体的な生活文化機能ゾーンとして整備し、港を市民に親しまれる空間とすることと位置付しております。

特に、末広・大町地区については、ここが函館港の発祥の地であり、港には、築港初期の石積護岸が残されており、これの保存、活用が要望されていることから、石積護岸を生かした親水プロムナードの整備を計画すべき、との提言を受けております。

この提言を受けて、平成３年には金森倉庫前面の物揚場を改良し、水際は昔の石積みの復元、そして物揚場敷地は周囲レンガ倉庫のイメージに合わせて石張舗装として整備を行っております。

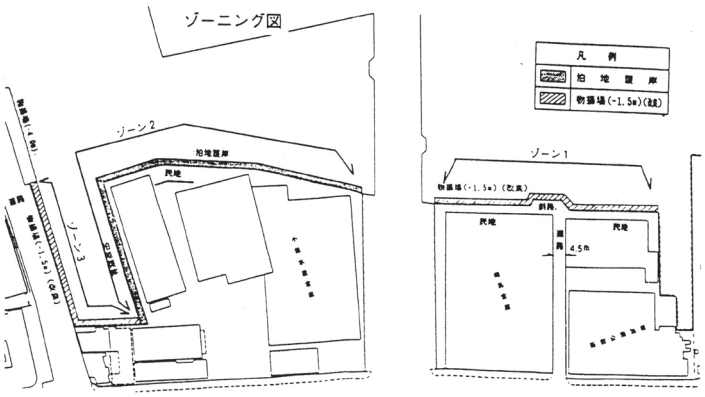
このプロムナード整備の一環として、平成６年度から大町地区（緑の島周辺）の整備にとりかかりたいと考えているわけでございますが、この地区につきましても「函館港再開発調査」の提言を尊重しながら整備を進めてまいりたいと考えております。

2. 整備の内容

この地区につきましては、平成５年度から基本設計・実施設計を行い、基本コンセプトを「ウォーターフロントプロムナードの創造」とし、次のような整備方針のもと整備を進めてまいりたいと考えております。

1) 親水性と歴史的石積護岸への親しみを高めるため、護岸の高さに変化をつける。
2) 伝統的建造物の持つ歴史的イメージを導入する。
3) 新島襄の碑と既存の船揚場の形状をいかしつつ一体的に整備する。
4) 極力既存護岸石を利用する。
5) 金森倉庫群からの連続性を持たせる。
6) 夜の景観に配慮した照明計画とする。

また、本計画地の護岸・物揚場の形態・周辺景観から、計画地を３つのゾーンにわけてウォーターフロントプロムナードを整備して行きたいと考えております。



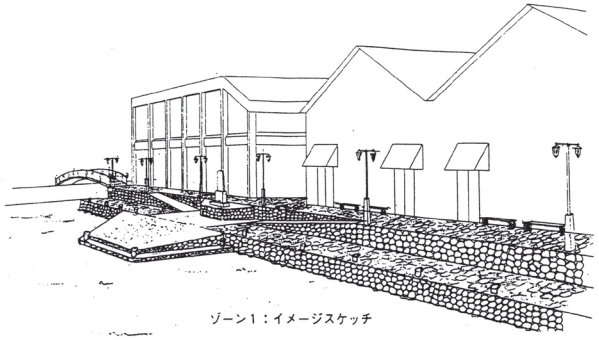
●ゾーン１の部分は、港湾施設としての利用上、物揚場となっていること、および老朽化が激しいことから、既存石積の位置で補強・改良することが困難な状況となっておりますので、既存石積から３ｍ程度沖出し、高さについては沖出部分を一段低くすることにより、親水性を確保するとともに、既存の石積にも親しめるよう考えております。

このゾーンの特徴として、新島襄の碑とその前面のスロープにあります。この部分については、既存の新島襄の碑周辺が狭隘な状況であることから、人々が集まれる空間を確保するため、そのままの状態で、３ｍ程度海側に移設し、船揚場のスロープについても同様に沖出し、一体的に整備することで、このゾーンのシンボルポイントとなるよう考えております。

●ゾーン２の部分は港湾施設としては、護岸となっており、この部分についても老朽化が著しいこと、また、民地が接近しているため、公共で護岸を管理する用地が無いなどのことから、ゾーン１と同じく４ｍ程度の沖出をして整備する方針で考えております。

●ゾーン３の部分は港湾施設としては、物揚場となっており、ゾーン１の物揚場と同様な整備になろうかと考えております。

このような一連のウォーターフロントプロムナード整備により、函館山山麓の観光施設と歩行者のネットワークが確保され、この界隈が開港当時のように人々が集い・賑わうことになるものと考えております。



ゾーン１：イメージスケッチ

旧谷地頭小学校保存運動の終焉と青少年宿泊研修施設の基本設計について

旧谷地頭小学校校舎の保存活用をすすめる会
会長　富岡由夫

旧谷地頭小は平成５年１月にすべてが取り壊されてしまったが、その後の運動の経過について振り返ってみた。平成５年９月には「旧谷地頭小学校保存運動の歩み №３」を出し、市議会での議論や住民訴訟の文書、これまで調べた各地の校舎保存運動の実情などを載せ、運動が風化しない様に配慮した。また、10月には６日間、函倉庫ヒストリープラザで「谷地頭小学校回顧写真展」を開き、取り壊し直前の校舎や昭和初期の児童の写真など、市民より提供をうけた130点をパネル展示して最後の訴えをした。

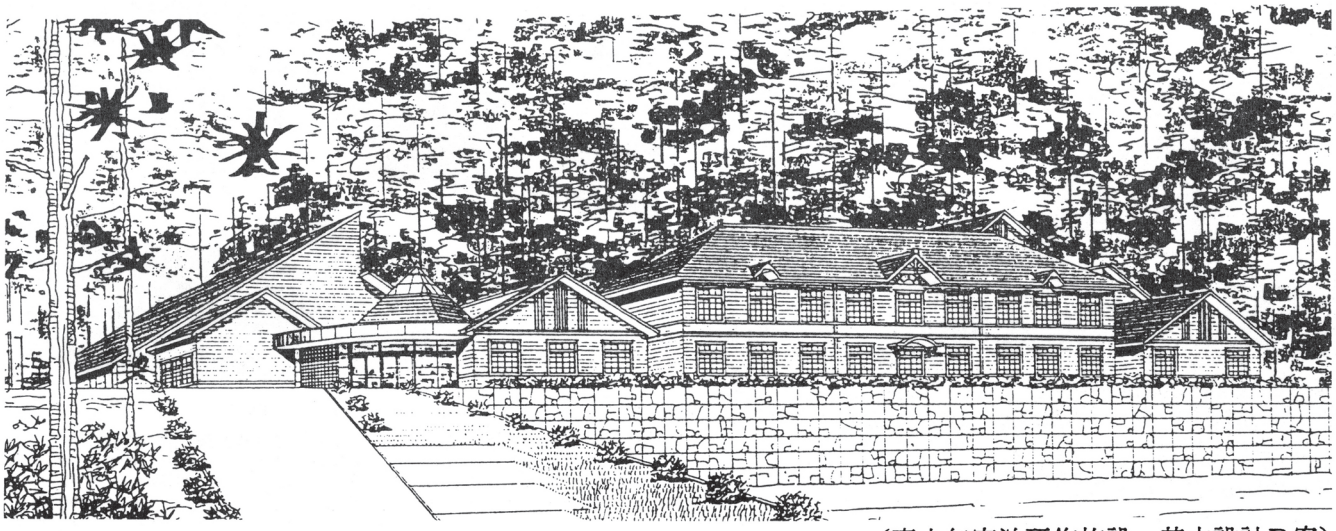
私達の５年にわたる運動は、実質的には実を結ばず、ただ虚しさのうちに終わってしまったが、精神的には函館の政治風土の実体を市民の前にさらけ出し、大きな刺激を与えた。函館市の現状を考えると、このような市民運動は今後も起こるであろうし、その時の激しさはより大きなものとなると思う。

ところで、今年の１月26日、道南青年の家で旧谷地頭小跡地に建つ「青少年宿泊研修施設基本設計」の４案A,B,C,Dについての説明会があった。この時提示された案は、何れも研修棟・宿泊棟・管理棟・体育館などが細分化されて並んでいた。そして宿泊棟は旧谷地頭小の正面校舎をミニチュア化したものであった。全体的に雑然とした感じが強いので、①統合した形でもっとシンプルに旧校舎のイメージを再現できぬか、そして、この中に研修施設の機能を充実して欲しい。②設計プロセスへの市民参加はできないか、などを要望した。

この様な説明会は私達だけでなく、谷地頭町会、住吉町会、谷地頭同窓会、旧ＰＴＡなど13団体とも個別に行われた。そして３月15日には、市議会総務委員会へ、地域住民・関係団体の意見として、市教委はＢ案を採り上げて報告した。関係団体の中には私達の市民運動に否定的で、市側の云いなりで風向きを変える団体も多く含まれている。研修施設の将来像はどうあるべきか真剣に考え、各地の研修施設を調査したのは私達の他数団体にすぎない。

すでに議会の承認を得たというので、私達はＢ案について一部修正の要望書を３月21日に提出した。①正面校舎を出来るだけ忠実にファサード形式で復元すること。特に中央玄関の部分は伝統的建造物群保存会の要望もあって、わざわざ番付解体をした処である。遺構は青柳小学校体育館の地下室に保管してある。充分これを参考にすべきである。②玄関ロビーを広くとり、史蹟散策の市民や観光客が立ち寄って休憩できるようにすること。玄関ロビーは教育上の配慮からも「ふれ合い広場」「話し合い広場」として広くとる処が多い。

この最後の要望は受け入れられるかどうかは分からない。少数意見として葬られる可能性もある。新施設の基本構想に対しては、市教委は自分の処で案をまとめ設計すべきであった。その過程で市民参加を求め摸索してゆけば納得のいく基本設計ができ上がった筈である。基本設計予算900万円も何分の１かですんだ筈である。業者委託で４案を作り市民の意見を聞く、これでは進め方が逆である。この様な対応の仕方は政治変革の流れの中で何れは変わって行くであろう。あれだけ激しい保存運動のあった谷地頭小跡地に、どの様な建物が立つか市民は注目して経過を見守っている。



（青少年宿泊研修施設　基本設計Ｂ案）

「吹屋（ふきや）を旅して」

会員　佐藤恒子

「今度の旅は、吹屋だ」と夫は云う。聞き慣れない地名に、一寸戸惑う。

岡山県川上郡成羽町大字吹屋は、重要伝統的建造物群保存地区に指定されていた。

４月中旬、桜は終わったであろうと思いつつ、車中の人となる。盛岡より新幹線で東京――岡山へと、伯備線に乗り、約一時間で備中高梁に着く。駅前にて朝食、ハイヤーでお城へ行く。入口で降ろされ、25分もかかってやっと城祉へ着く。山より見渡す高梁川や市中は、整然として美しかった。サクサクと函館近辺では見慣れない土砂が滑りやすく、気をつけていたが、帰り道は見事尻もちをついた。くねくね曲がる山道を下り、鶯の声が桜の花の間から聞こえ、菜の花とマッチして心をなごましてくれた。途中、頼久寺を見学し、ハイヤーにて吹屋へ向かう。

バスは日に三本より走らないという。人家の無い曲がりくねる道を走ること40分。突然、前方、崖の上に聳える広兼邸。お城の様な石垣がずーっと続く、その石垣の上に裏の山を背負っている。（現在県の文化財となっている）

ここ吹屋は、ベンガラの町である。ベンガラで財をなしたとは云え、こんな山奥にお城の様なお屋敷を造るとは。手洗い鉢の水琴窟の音色の美しい事。勝手口には、山からの湧水が流れている。

備中吹屋は、赤い町であった。町中静かで、時折り通る車以外、人も通らない。郵便局も普通の家と同じ造りである。店に入り「ぜんまい」を求めた。おばあさんは「日曜日以外は、人は来ませんネ」と云った。

吹屋の町並みは、入母屋型妻入りの郷土館や切妻型の家で、壁に塗り込められたナマコ壁がいい。又瓦が好い。石州瓦を用い、ベンガラ格子に白壁、なまこ壁が美しく、みんなみんな正物を使っている建物ばかり。



（なまこの美しい吹屋）

仲好く、きちんと軒を揃えてたたずむ家並みに、しばし時の流れを忘れ、見とれるのであった。

戦後科学染料に押されベンガラがさびれて行った。

吹屋は、忘れ去られようとしていたが、横溝正史の映画「八ツ墓村」で有名になり、再び脚光をあびたのだった。ロケーションの舞台となったのが広兼邸である。

お隣りの西江邸へと車でゆく。お隣りとは云え、広兼邸から７キロもあった。

うす暗い坂道を登ると、櫓門をはさんで母屋から倉へ石垣が見え、ナマコ壁の美しい西江邸が浮かんでいる。「ご用の方はボタンを押して下さい。」の貼り紙で門をくぐる。色白のやさしげな奥様が受付して下さる。プーンと何処からかいい香り。それが柊の黄色い花とは知らなかった。何度も鼻を寄せた。

昔、西江邸は、役職にあり、ケンカ・バクチ等の軽犯罪を裁いた小さなお白州がある。

三千坪という敷地に建つ邸は、銅山とベンガラで財をなし、現在倉は、資料館となっており、天井はベンガラが塗ってあり、吹屋ベンガラを用いた赤絵の伊万里焼の大皿や鉢、輪島塗りの器が美しく光っていた。人家のない曲がりくねった山中に、こんな豪邸があったとは、いかに昔、勢力があったかを垣間見る吹屋だった。人の住んでいない広兼邸と、現在尚生活している西江邸はちがっている。建造物は生きものである。人が住んではじめて家という建物が光るものではなかろうか。西江邸の行き届いた庭につつじが咲く頃、又行ってみたい吹屋である。



（西　江　邸）

㊟　ベンガラは帯黄赤色の顔料で成分は第二酸化鉄です。聞くところによれば、吹屋は標高550mの山嶺に江戸時代から明治にかけ中国筋第一の銅山の町であり、加えて、日本ではじめて銅の鉱滓からつくったベンガラで町が大いに潤ったという。「重伝建」を含む今日の吹屋の町並みの基礎がつくられた。（編集子）

「會田金吾さんを偲ぶ会」に出席して

会員　大森好男（札幌市）

函館を離れて十年、函館とのご縁が日々疎くなるのもやむを得ないことと思う。この度のご案内をいただいたのを幸いに函館へと足を運んだ。会場の五稜郭タワーは、歴風会の会合で度々利用し、また私が離函の折送別会を開いていただいたところでもあり、懐かしさひとしおです。会場では歴風会の方々やかつての郷土史仲間など旧知の顔ぶれも多く、十年の空白をしばし忘れさせてくれました。

テーブルスピーチの最初に指名され、いささか戸惑いましたが、おおよそ次のような話をしたと思います。（一部加筆）



私が會田さんと知り合いになったのは、昭和53年から２年余りにわたって道新函館版に連載された「故郷のしおり」がご縁でした。やがて九人会というグループができて度々お合いすることになった。しかし私は職業柄どうしても学校関係に関心があり、會田さんの研究分野とは異なっていたので、初めのうちはあまり話すこともなかったように思う。

ところがその私がひょんなことから製鉄所（昭和10年代に操業していた大沼・久根別の両製鉄所）のことを調べることになり、それで會田さんからいろいろとご教示をいただくことになりました。そのころ私は車の免許を取得したばかりです。初めて車を運転した嬉しさのあまりよく人を乗せてあちこち走り回ったものですが、このときも會田さんを乗せて東大沼の製鉄所跡を訪ねました。そして農家の庭などに今も残る鉱滓の層を検分してもらいました。

車といえばこんなこともありました。昭和56年、歴風会の研修として尻岸内町（現恵山町）を訪ねることになり、その下調べのため會田さんと田中雪子さんを車に乗せて出かけました。行きは海岸線でしたが、帰りは鉄山経由の山の中を走りました。尻岸内から我眉野までの山中は初めてで、カーブも多く運転は要注意です。秋も深まったころで紅葉が見頃でした。後部座席のお二人は素晴らしい紅葉に度々感嘆の声をあげていましたが、ハンドルを握る私はカーブに気をとられ、紅葉に目をやるゆとりはありませんでした。函館の街が見えてきた旭岡あたりで秋の日が沈み、夕焼けの中にはっきり写し出された函館山のシルエットもまた素晴らしい眺めでした。後日、會田さんから何度も「あのときの紅葉と夕焼けは忘れられない」とお礼をいわれました。しかし、運転未熟にもかかわらず人を乗せて走り回り、よく事故が起きなかったものだと、今にしてヒヤ汗をかく思いがいたします。

昭和59年、私は利尻へ転任となりましたが、その朔北の離島にも庚申塚が数基あるのです。會田さんから庚申塚に関する著書をいただいておりましたので、早速自転車で島内をさがし回り、写真を撮って送った次第です。その後私が札幌に居を移してからも、會田さんから度々ご労作の立派な著書の寄贈にあずかり、また私もささやかな本を作りましたのでお送りし、文通だけは続いておりました。しかし私の離函後、お合いする機会のなかったことを非常に残念に思っています。

今ここに會田さんの遺影を拝して、あらためて温厚篤実そしていつも笑顔を絶やさないありし日の會田さんを偲ぶとともに、久しぶりに皆さんとお合いできたことに感謝申し上げる次第です。



（昭和56年 會田さんと共に　在 古武井）

「會田金吾さんを偲ぶ会」を終えて

「會田金吾さんを偲ぶ会」
日　時：平成６年４月10日(日)　午後４時
場　所：五稜郭タワー２Ｆホール
出席者：９４名

私どもが敬愛しておりました、当会前副会長、顧問の會田金吾さんが平成４年７月14日逝去され、はや３年目を迎えました。生前多岐にわたり数多くの実績を残されたことは、ご承知のことと存じます。

會田さんの没後、未発表の遺稿「函館の技術職の一端」と「函館に残る煉瓦工場」の２編が発見されました。會田さんが足を運んで調査された成果が凝縮されております。この２編を主体に未公刊の中から選択したものを含め、“はこだて史譚”（會田金吾郷土史論集）を、函館の歴史的風土を守る会が出版いたしました。

この出版を機会に、生前會田さんとそれぞれのお立場でご親交のあった方々、文化団体の方々とご相談をして“會田金吾さんを偲ぶ会”を上記により開催いたしました。

当日は、函館市教育委員会教育長金山正智さんを始め、友人・知人・関係団体の方々94名がご出席下さいまして、ご挨拶と會田さんに纏わるスピーチをいただき、會田さんの生前に思いをはせ歓談に入り盛況裡に終了いたしました。

欣子夫人から、偲ぶ会を開いていただいたこと“はこだて史譚”を出版していただいたことに対し感謝とお礼のことばがありました。



（奥さんのお礼のご挨拶）

＊ おしらせ ＊

はこだて史譚（會田金吾郷土史論集）

会員の方でまだお求めになっておられない方は、是非事務局までお申し出下さい。ご協力をお願いします。

Ｂ５判 303頁　￥ 2,000円　送料 380円
事務局：市内五稜郭町43－9
五稜郭タワー内（電話0138-51-4785）
函館の歴史的風土を守る会
事務局長　工藤　光雄

会費納入（年会費、平成６年より 3,000円）をお願いします。

◎郵便振替の口座番号が変わりました。
０２６３０－３－６３０
◎銀行振込口座の変更
北海道拓殖銀行五稜郭支店
㊟　０２８－３０１７９５７
歴風会事務局長　工　藤　光　雄

事務局日記

☆４月10日　“會田金吾さんを偲ぶ会”が五稜郭タワーで開催。94名のご出席をいただき盛況裡に終了いたしました。（別記掲載）
☆５月17日　平成６年度函館市文化団体協議会総会が、国際ホテルで開催。（工藤事務局長出席）
☆５月21日・22日　第17回全国町並みゼミ須坂大会が、長野県須坂市で開催。田尻副会長、石井運営委員が出席しました。（別記掲載）
☆５月28日　平成６年度定期総会（東邦生命ビル）平成５年度事業報告、決算報告、改正（会員会費「2,000円」を「3,000円」）、平成６年度事業計画(案)予算案及びチャリティ益金の使途等について承認決議をいただきました。会員各位から活発なご意見が出されました。今後会の運営に取り入れてまいります。

役員改選にあたり、会長に浜島国四郎、副会長に田尻聡子・落合治彦、監事に久住盛、岡田祝津子の方々のご留任をお願いすることになりました。会の運営上副会長を１名増員したいとの意見があり、この場で選出と云ってもむづかしさがあるので副会長１名については会長一任ということで決議をいただいた。運営委員・事務局長については後日会長から委嘱する。

総会に先立ち“英国に学びタイネ”と題し村岡武司さんから、スライドを交えて英国のトラストの現況や文化財の保護、まちづくりなど興味深い講演をしていただきました。

編集後記
昭和53年４月、足助・有松で「第一回全国町並みゼミ」が開かれた同じ日、歴風会は創立総会を以ってスタートをした。爾来10数年間、当会報に実に多くの方々が原稿をお寄せ下さった。改めて感謝します。　田尻